

近世的隱逸觀「市隱」の成立

——俳諧と漢詩文を中心に——

博士論文執筆者：李 国 寧

本学位請求論文の公開審査会は、2013年3月20日午前10時30分より正午まで、学位請求者と主査1名、副査2名と傍聴者10名の参加を得て、文学学術院39号館第5会議室で開催された。以下に本論文の概要、意義と審査の内容について簡略に説明を行う。

本論文は日本近世前期の俳人松尾芭蕉の高弟として名高い宝井其角と日本近世前期の学問を主導した林羅山の嫡男林鶯峰の詩句と文章とについて緻密な分析を施すことを通して、両者の隱逸志向を浮かびあがらせ、両者を「市隱」または「吏隱」という概念で結び付けることに成功したものである。其角は俳諧、鶯峰は漢詩文なので、一見する所、両者は相容れないようであるが、其角の俳諧の門弟である亀毛、午寂が同時に林家で漢学を学んだ者であるといったように両者にはまず人的関係で濃厚な結びつきが認められ、俳諧と漢詩文と表現形態は異なっている、何らかの形で自己を取り巻く現実には違和感を抱き、それに距離を置こうとする隱逸の精神において、両者は見事に合致することが説得力を以て述べられている。

宝井其角は遊蕩俳人として芭蕉の高潔な人格と比較されることで道徳的裁断を加えられがちで、そのためにその作品の評価も芭蕉に比して低いものでありつづけた。林鶯峰も御用学者羅山の嫡子として「鶯峰の考えのどこからも真実の学問と文学は出てこなかった」（『近世初期の漢文学』）と日本近世文学研究を長く牽引した中村幸彦博士に断ぜられた如く、長く低い評価に甘んじ続けていた存在である。この両者を隱逸志向という側面に着目して、その多様な文学性を解析提示し、以後の研究の橋頭堡たらしめたのが、本論文の担う大きな意義であり、その意義は主査、副査ともに認める所となった。

論文は大きく二部に分かたれ、第一部は主として宝井其角を扱う俳諧の部であり、第二部は林鶯峰を扱う漢詩文の部である。第一部は七章から構成されていて、第一章から第四章までは其角を正面から論じるもので、第五章から第七章までは其角の文藝と隱逸志向の独自性を明確に浮かびあがらせるために、芭蕉の文藝と隱逸志向とについて論じたものである。第一章は「市隱其角—俳諧における市隱の成立—」と題するもので、全国規模にして査読の厳正を以て鳴る俳文学会の機関誌『連歌俳諧研究』に掲載されたものである。本章において学位請求者は、従来学界に

においても曖昧な意味のままで使用されてきた「市隠」という概念を出典である『文選』の「反招隠詩」に再検討を加えることで洗い直し、明確な定義を施した。その結果、従来芭蕉が近世における代表的「市隠」であるとしてきた学界の通説を覆し、元禄の江戸という繁華な都市に身を置きながら、精神的には常に隠逸への憧憬を句文を以て表現しつづけた其角こそが「市隠」の定義に合致すると明快に主張した。

第二章「其角における乞食の意義」は芭蕉と其角との句文に表現された「乞食」観を対比することで、其角の「乞食」は常に明るく快楽的に共感を以て描かれていて、芭蕉のそれは常に悲愴感を以て表現されていると結論し、その「乞食」との距離の近さに、日蓮宗徒でもあった其角の『法華経』に基づく平等思想が横たわっていたであろうことを推定したものである。其角と『法華経』との関係は、先行研究をふまえて、字句を対比しての実証的なもので、単なる憶測の域にとどまるものではなく、十分な評価に値するものである。

第三章は、従来学界の通説では、其角の白居易受容は、其角の漢詩文に対する素養が評価されないこともあって、やや空疎で実態を伴わない標語的なものと目されてきていたものであったのを、ひとつの句や文を作るのに、複数の白居易の詩文の内容を畳み込むという学人其角の表現手法をいくつかの具体的な事例に基づいて提示したものであり、叙述にやや強引さは認められるものの、概して妥当な見解を述べているものとして、其角の白居易受容を表面的なものと考えてきた副査の一人からも承認された。

第四章は第二章で取り上げられた日蓮宗徒としての其角が、『法華経』の中で展開される平等思想を受容しているであろうという問題から派生して、其角の句文の中から『法華経』摂取の跡が認められるものについて論じたものである。字句や発想の一致についての指摘に止まる嫌があり、句文の解釈が『法華経』を導入することでどのようなものとなっているかを提示しきれていない弱点はあるが、そのことは学位請求者自身も自覚していて、今後の課題としている。

第五章は第一章と対をなす内容で、元禄江戸の都市文化を背景に作られた其角の俳諧を「市隠」思想の具現化したものと捉えるならば、芭蕉の俳諧は地方や田園の風俗景観を背景とする漂泊の隠者思想の具現化であることを実証したものである。第六章、第七章は芭蕉の李白受容と白居易受容とについて述べたもので、後者は其角とは別の意味で芭蕉も白居易を深く読み込んでいたことを、前者は芭蕉にとっての李白と杜甫とは大きくその位置を異にしていたことを明示したものである。

第二部は「真実の学問と文学」は存在しないと論断されてきた林鶯峰の詩文の再評価を試みたものである。第八章「吏隠鶯峰—漢詩文における吏隠の成立—」は、官僚でありながら、世俗の価値観に振り回されず、静寂な心境を保とうとする「吏隠」という概念が、林家の嫡男として、『本朝通鑑』編纂を主幹した鶯峰にとって、理想像であったことをあまたの詩文の表現に即して論証したものである。同時に第一部で俳人其角の理想像であったと論証した「市隠」という概念と「吏

隠」という概念とが隣接するものであって、両者の理想像の設定には何らかの影響関係があったことを推察するものである。本論文は独立して全国的な学会誌であり、編集委員による厳正な査読を以て鳴る『和漢比較文学』にも登載されたものである。第九章「林鶯峰と司馬温公の「独立園記」」と第十章「林鶯峰と邵康節」とは第八章を総論とすれば、各論の体をなすもので、「吏隠」概念を具現化して唐土の先駆者として、鶯峰が司馬光と邵雍とを常時意識し、典範として仰いでいたことを表現の細部に即して実証したものである。殊に邵雍との関係について述べた後者が、従来宋学の大家として思想の分野でのみ注目されがちであった邵雍の少なくない詩文の近世初期漢文学への影響を指摘しえた点で評価に値する。邵雍については終章で其角、鶯峰の双方がその易学に恩恵を被っていることを指摘したことの意義も無視できない。

終章において、学位請求者は本論文の反省すべき部分と今後の課題について述べているが、その内容は今後本論文における問題意識の延長線上に多くの研究成果が期待されるものである点で高く評価される。

学位請求者は本論文において、あまたの漢詩文の引用を行っているが、そのほとんどは訓読を施してのものである。通常、外国からの留学生が日本文学を学ぶ場合、東洋学の多くの場合がそうであるように、漢詩文の引用は原文のままで、句読点のみを施してなされることが多い。これは漢文を中国語として扱うスタンスを留学生が保持しがちであることを意味する。しかしながら、日本古典文学の文体の骨格のひとつが漢文訓読体であることを思うとき、正確な解釈をなさずんば、施し得ない訓読という作業を無視することは、正統的な研究スタイルとは評しえない。学位請求者は中国人留学生でありながら、直読式で資料を読むことにあきたらずに、本論文に開示されたような高い漢文訓読能力を留学中に体得しえたことは、日本古典文学を中国に帰国の後に講ずる立場にあるものとして、極めて心強く、高く評価すべきことであると判断され、論文の内容とは別の案件ではあるが特筆大書しておきたい。

しかしながら、留学期間は限られていて、短期間に完璧な日本語の叙述能力を身に着けることは困難を極めたごとくで、行文中、いくつかの不自然な日本語表現が指摘しうる。ただ、それらには論旨の破綻に直結するようなものは皆無であり、いわば白石の微瑕とみなすことのできる範囲にとどまっている。

以上、本論文は従来の通説や既成の学問の枠組みを大きくゆるがし、新たな日本近世文学研究の沃野を切り開く意義を有する点で、高い評価を下しうるものであり、博士（文学）の学位を授与するに値するものと、主査、副査が全員一致で判定したものである。

以上

2013年3月20日

主任審査委員	早稲田大学文学学術院 教授 博士（文学）早稲田大学	池澤 一郎
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	高梨 信博
審査委員	和洋女子大学 教授 博士（文学）早稲田大学	佐藤 勝明

占領期の言論統制と坂口安吾の創作活動の研究

博士論文執筆者：時野谷 ゆ り

本論文は、提出者が学部・大学院修士課程以来一貫して研究の対象として来た昭和期の作家坂口安吾の創作活動のうち、敗戦からGHQによる占領期にかけて、どのような活動をして来たかを、具体的に作品分析を通して明らかにしつつ、当時の言論統制の実態の中で安吾がどう時代への姿勢を示してきたかに焦点を当て論じた研究の集大成である。特に、近年調査が進んだ、GHQ／SCAP 検閲の基本的資料であるアメリカ・メリーランド大学のプランゲ文庫の文献を駆使し、実際に現地調査をも含む作業を踏まえた立論は、注目に値する。査読のある全国誌に3本以上の論文を含み、総枚数600枚の達成である。

提出者は、早稲田大学大学院文学研究科とアメリカ・コロンビア大学大学院とのダブルディグリープログラムに応募、1年半のアメリカ滞在を経て、コロンビア大学の修士号も取得した。その成果も、本論文の一部に吸収されている。

「序章 坂口安吾の創作活動と言論統制の問題」は、書き下ろしの部分で、本論文の基本的スタンスを明らかにしつつ、戦時下の安吾の文学達成を論じて、戦後の活動の基盤を明確にする。とりわけ、戦争に対してどう安吾が対処したかを、戦中の「日本文化私観」、戦後かかれた有名な評論「墮落論」の分析から論じている。文表の表面のみならず、「墮ちよ」という逆説的な発想が、何処から来たのかを明らかにして、肉体を拠りどころとする「生」という問題を軸に、戦時下の安吾の模索を論じる。

「第一部 占領期の言論統制下での坂口安吾の創作活動」は、全6章からなる。1945年9月から1949年10月までの時期が、対象となる。

「第一章 「白痴」論—戦時下の「人間」像」は、戦後まもなくの代表的短篇「白痴」の分析で、主人公伊沢と白痴の女の、肉体を介した人間関係を辿りつつ、安吾の戦争体験の内実と、戦争という「運命」に身を委ねた「人間」の姿勢を論じている。

「第二章 「戦争と一人の女」「続戦争と一人の女」論—坂口安吾の被検閲作品（一）」は、プランゲ文庫の詳細な調査を踏まえた力作で、特に、GHQ／SCAPの検閲によって、作品の発表、単行本化においてどういう操作がなされたかを分析、2篇の複雑な関連性を辿っている。「新生」

「サロン」の二つの雑誌の性格の違いなどにも目を向けており、論述は手堅い。

「淪落その他」「特攻隊に捧ぐ」論—坂口安吾の被検閲作品（二）は、もう一つの検閲のあり方が明確な作品の分析であり、「婦人公論」などの発表媒体に注意しながら分析したところに留意点がある。

「第三章 「決闘」論—戦後の「特攻隊」表象の中で」は、検閲において問題点の多い「特攻隊」を扱った安吾作品の分析であり、当時どのように作家が特攻隊を扱ったのかを広く探査、そのパースペクティブの上に立って、「決闘」における戦争に行く青年と女性の肉体の問題をどう安吾が考えたのかを明らかにする。

「第五章 坂口安吾の「流行作家」時代——一九四八年の同時代評をめぐって」は、戦後の諸雑誌で安吾がどう評価されたかを検証、これまで注目されて来なかった「CAMERA」や「果実」などの地方雑誌における安吾評価を分析する。

「第四章 坂口安吾と「満洲」—『吹雪物語』から『火』へ」は、長篇『火』を戦時中の『吹雪物語』と合わせ分析、その「満洲」表象を比較する。そして、『火』においては、安吾が同時代の社会に対する批評性を十分発揮出来なかったとする。

「第二部 占領期の言論統制終了後の坂口安吾の創作活動」は、全2章からなる。

「第一章「安吾巷談」の形成と方法」は、1949年以降スランプに陥っていた安吾の復活を示す、1950年の「安吾巷談」を対象に、雑誌「文藝春秋」の編集者池島新平のすすめで、新たな境地を築くことが出来た軌跡を辿る。読者の反応を取り込んだ、ルポルタージュの方法が、どう安吾らしさを生み出したかを分析する姿勢は鮮やかである。

「第二章 坂口安吾と「チャタレイ裁判」」は、安吾が裁判を傍聴し、時評の中で発言した内実を分析、安易なナショナリズムではなく、最後まで日本の再建においては占領政策は必要であったという実質主義的な認識を持ち続けた問題点を明らかにする。

「第三部 占領期の言論統制と文学者」は、全2章からなる。

「第一章 占領期の「右翼」と短歌—歌道雑誌『不二』にみる影山正治の言説とGHQ/SCAPの検閲」は、内容的に興味深い一章である。影山という右翼文学者が検閲に対し闘争的に振る舞い、どう占領期に作品を発表し、検閲を受けたかの基礎調査を試み、時代の緊張の様子を浮き彫りにしている。雑誌での検閲状態を示す表を資料として提示する。

「第二章 占領期の性表現の自由と統制—舟橋聖一「横になった令嬢」論」は、作品が雑誌と単行本においてどう2段階的に検閲がなされたかを調査、現在簡単に見ることの出来ないこの作品の時代での位相を明らかにする。

「終章 今後の研究課題」は、安吾の態度を、各時代の検閲をその目的と必然性から峻別するという機能主義的で合理主義的な態度とまとめ、今後の研究方向について論述している。

全体として、プランゲ文庫の資料体を生かした研究として評価出来るが、個々の小説などの読

解においては、やや先行研究の指摘のまとめになってしまっている部分も多く、論者の指摘が弱いところもみられる。メディア・文体など方法的に見て揺れており、全体の構成などにおいても、やや統一感にかけるところもある。とくに安吾の戦前・戦中の作品のまとめた論述が無いため、せっかくのこの時期の分析が活かさないこともあろう。検閲という政治性を論ずるにも姿勢がいまひとつで、「構築」「合理主義」「機能主義」などの用語の規定もあいまいである。こうした問題点も散見するが、占領期の問題を明らかにしつつ、この時期の坂口安吾の創作活動のアウトラインを分析したのは手柄で、ここに「博士（文学）」の学位を授与するに値する論文であることを認定する。

2013年4月2日

主任審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	中島 国彦
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授		高橋 敏夫
審査委員	早稲田大学政治経済学術院	教授		宗像 和重
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	十重田裕一
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	鳥羽 耕史

古事記構造論

——大和王権の〈歴史〉——

博士論文執筆者：藤 澤 友 祥

本論文は、大和王権の史書として編纂された『古事記』（和銅5（712）年成立）に関する研究論文である。

『古事記』が、神話や伝承を用いながら、上巻（神代：天地創成から初代神武天皇の誕生まで）・中巻（初代神武朝から第15代応神朝まで）・下巻（第16代仁徳朝から第33代推古朝まで）の三巻に構成されていることの意味を重視し、形成過程や資料性を踏まえながら全体を一つの構造体（作品）として捉え、作品としての読解と評価を試みたものである。上巻の「神代」が、神々を主たる登場人物とした〈建国神話〉の形態をとっているのは、民間で伝承されていた本来の神話・伝承が人の生死や社会のあり方を規定する力を持っていたからに相違ないとし、その〈建国神話〉が中巻における王権国家の〈歴史〉を保証し、その中巻が下巻における皇位継承のあり方を正当化する役割を持つという具合に、全体が神話・伝承の力を利用しながら、高度な計算のもとに設計された構造体であることを具体的な事例を示しながら説いている。

本論文は、学内外の査読付き学術誌に採用された4編を含めた合計9編の論文をそれぞれ一章とし、それを内容によって三部に分け、それに序論と結論を加える形で構成されている。以下、部立て・章立ての順序にそって概要を示しながら、審査報告をする。

第一部は「王権を支える『古事記』の神々」と題し、同書における〈神話〉の存在意義を示す。第一章「猿女の君—『古事記』文脈での位置づけ—」では、「猿女の君」の段が〈建国神話〉の文脈の中で担う意味について考察する。アメノウズメが伊勢地方に縁のあるサルダビコの「名」を負って天孫に奉仕することを、古代における「名」の意味を踏まえて考察し、将来的にアマテラスを祭ることになる伊勢地方が天孫によって統一されたことを意味するという新しい読みを導いている。第2章「氣比の大神—『古事記』上巻神話との対応—」では、応神天皇が、朝鮮半島へ向かう拠点としての角賀の氣比の大神から「名」を献上されることの意味を、天皇による天下統治を保証するものとして捉え、応神天皇が天孫ニニギと重ねあわされた存在であると結論づける。第三章「秋山之下氷壮夫と春山之霞壮夫—神話の機能と『古事記』の時間軸—」では、秋山・春山の兄弟争いは、上巻〈神話〉における海幸山幸神話などの兄弟争いに由来するという読みを

示し、それが下巻における兄弟間の皇位継承を保証すると論じている。第四章「葛城の一言主之大神—『古事記』下巻の神—」では、一言主之大神と天皇との関わり方に焦点をあて、そこに大和王権国家において理想とされる君臣のあり方を見届ける。以上、第一部では、神や神話が『古事記』という史書の文脈、つまり〈歴史〉叙述の上で如何に重視されているかが説かれている。『古事記』が史書でありながら、なぜ〈神話〉を有しているかという命題を意識しながら、三巻の有機的な連繋を見届けようとする意欲的な論考であった。

第二部「王権を支える『古事記』の皇位継承理念」では、『古事記』が拠り所としている皇位継承の理念について考察した。第一章「三皇子分掌と天下相譲—父子継承から兄弟間継承へ—」は、応神朝における大雀命（仁徳）と宇遲能和紀郎子と大山守命による三皇子分掌が、上巻〈神話〉におけるアマテラス・ツクヨミ・スサノヲの三貴子分治に重ね合わされていること、また前二者による相譲に儒教的な禪譲の理念の片鱗があることを認め、それが下巻冒頭の仁徳天皇の即位と、仁徳天皇の皇子に始まる兄弟間の皇位継承のあり方を正当化するものであることを明らかにした。第二章「水歯別命と曾婆訶理—『古事記』における儒教思想—」では、当該伝説にあらわれた「信」「義」という表現に着目してそれが儒教思想に基づくものであることを確認し、それと智略を駆使して敵を討伐するという古代の神話伝承の型とが共存し、葛藤しているという新しい読みを提示している。仁徳天皇に代表される儒教的な聖帝を一つの理想としながらも、なお古くからの神話伝承を重視する『古事記』の方針を指摘している。第三章「下巻の臣下の諸相—『古事記』における君臣の関係—」は、下巻にみえる天皇と臣下との関係を示す記事を分析し、君臣の絶対的な上下関係が、神と天皇との関係によって説かれていると分析する。以上、第二部では、儒教思想を受け入れながらも、依然として伝統的な神話伝説の力の拘束から免れていない『古事記』のあり方を指摘している。複数の思想の衝突や重層的な歴史があり、その上に『古事記』があることを指摘した、形成論・成立論を踏まえながらの新しい作品論として意義のあるものである。

第三部「王権を支える『古事記』の後妃皇子女」は、『古事記』が天皇そのものではなく、后妃や皇子女の存在を通して王権のあり方を説いている点を指摘する。第一章「宇遲能和紀郎子—下巻への布石—」では、中巻末部の応神天皇条における宇遲能和紀郎子が、天皇から「天津日繼」を委任されていること、神に通じる力を持つこと、反逆者を討伐する智略を有していることから、有力な次期天皇の候補者として描かれていることを指摘し、それでもなお大雀命が皇位を継承する理屈として儒教思想が用いられていると分析する。そして、これが中巻の父子継承から下巻の兄弟間継承へと転換する布石の意味を担っていると説いている。第二章「石之日賣命—「嫉妬」による排除—」では、イハノヒメ皇后が嫉妬することの意味について、仁徳天皇を理想の王者として描くためという通説を否定し、嫉妬を利用することで皇統譜の正当化を図るためという新しい読みを提示している。以上、第三部では、従来の読みに変更を求め、皇子や皇后を使いながら

『古事記』が絶対的な皇統譜を主張していることを説いた。

【総評】

上述のように、神話伝承の力を自覚し、その思想や型を利用しながら、三巻構成の〈歴史〉書として巧みに編纂された一つの構造体として『古事記』を捉えた論文である。『古事記』の〈神話〉や〈伝説〉は、大和王権の手によって創作された建国の〈神話〉であり、国史としての〈伝承〉でありながらも、神話・伝承という型を用いていることの意味は軽くない。国家が形成される以前、この列島には数知れぬ村落共同体があり、それぞれが独自の神話・伝承を信じ、それに従って人々は生き、死に、また社会の掟を守っていた時代があったと想像されるが、それがやがて大和王権によって一つの国家に統一されていった。その国家形成の過程と、『古事記』が神話伝承の型を用いながら、国史を創作していった営みとが重なってくる。形成論・神話論を踏まえながら『古事記』という一つの作品のあり方を見届けようとした本論文の手法は、従来の『古事記』作品論に修正を求めるものであり、精神史上における大和王権国家の成り立ちを考える上でも有意義な方法として、上代文学研究の発展に寄与する可能性を有している。各章に示された新見が、本文校訂、研究史の整理という基礎的な作業の上になされていることも評価できる。もちろん『古事記』の全体を論じきった訳ではなく、一つの学説として評価されるには、今後さらなる研究が必要であるが、課程による博士（文学）の学位を授与するに十分値する論文であるとして、審査員一同の意見は一致をみた。

審査員3名の投票の結果、「可とする票数…3票、不可とする票数…0票」であった。よって、本審査委員会は全会一致で博士学位の授与を「可とする」という結論に至った。

2013年12月7日

主任審査委員 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授 博士（文学）早稲田大学

松本 直樹

審査委員 早稲田大学文学学術院 教授 博士（文学）早稲田大学

高松 寿夫

審査委員 九州共立大学 教授 博士（文学）早稲田大学

工藤 浩

『源氏物語』 引用表現論

——和歌および歌語表現を中心に——

博士論文執筆者：中 西 智 子

本論文は、『源氏物語』に関わる和歌ならびに歌語などの引用について論じている。その目的は、冒頭の序章において説かれているように、現実世界の出来事と虚構世界との重なりあう地点におかれた〈ことば〉のになう重層的な意味内容とその機能の探究ということにある。その探究は、おもに二つの視点から考察される。すなわち、一つめは物語の内部（虚構の世界）において先行する和歌などがいかに引用されているかという視点、二つめは物語の外部（現実の世界）と『源氏物語』とがいかに関わり、また『源氏物語』がいかに引用されているかという視点である。そうした二つの視点に対応して、全体は二部構成となっている。なお、全体の分量は四百字詰原稿用紙換算で八〇〇枚以上に及ぶ。

「第一部 『源氏物語』に見える引用の諸相——人物造型にかかわる手法の多様性——」では、『源氏物語』における和歌、歌語、さらに催馬楽・風俗歌など歌謡の引用によって重層的な意味が生成されていることを丁寧に論じつつ、従来の注釈、論考では看過されてきた人物造型に関わる多様な手法を明らかにしている。

四つの節からなる「第一章 女君の官能性の形象——古歌・歌語・歌謡の引用表現から——」では、紫の君（少女時代の紫の上）、女三の宮、朧月夜、玉鬘などの女君たちに関する叙述において、古歌、『万葉集』に由来する歌語、催馬楽・風俗歌などの引用をちりばめることによって官能的な意味合い、艶めいた雰囲気などがあらわされていることを論じている。そこで何が引用されているかという点については、古注釈以来、現代にいたるまでの諸注釈などにおいてほとんど指摘済みといえるが、これらの官能性の形象についての指摘は、従来の諸注釈の把握、および諸論考の説を大きく更新するものといえる。

また、「第二章 女君の〈老い〉の形象——浮舟・朝顔斎院をめぐる引用表現から——」においては、三つの節にわたり、浮舟および朝顔斎院の〈老い〉の形象方法が論じられている。ここでも『万葉集』などの古歌との関わり、また白詩「陵園妾」などの引用を手がかりとして、たとえば〈老い〉にまつわる悲壮感に諧謔性を帯びさせるような重層性をとらえている。また、『紫式部集』収載歌と浮舟の詠歌との共通性に注目しつつ、〈老い〉を経由した華やぎ、軽み、さら

には〈生〉へと向かう本能的な力なども解析されている。

一方、「第二部 紫式部周辺の和歌と『源氏物語』——「作り手」圏内の記憶と連帯——」では、紫式部周辺における和歌が検討の対象とされる。すなわち、紫式部という物語作者と何らかのつながりを有する人物の詠歌が、クローズアップされることとなる。

「第一章 『為信集』と『源氏物語』との関わり——紫式部の母方の祖父「為信」の名を冠した家集——」は、副題が示すとおり、紫式部の外祖父の名を冠した『為信集』と『源氏物語』との関係を四節にわたってきわめて詳細に論じたものである。この『為信集』と『源氏物語』との間に見いだされる複数の類似、照応箇所についてはもちろんこれまでも論じられてきたのだが、問題は『為信集』の「為信」が紫式部の外祖父といえるのか、そもそも『為信集』は『源氏物語』よりも先に成立したといえるのか、といった疑問がいまだに解決していない点である。本章では、これまでの対立する諸説を整理した上で、書名、詞書、編纂のあり方、収載歌の特徴等々、さまざまな角度からこの難解な歌集について検討し、『源氏物語』に先行する歌集であると結論づける。さらにこの「為信」を紫式部の外祖父と仮定した場合にみえてくる特質、すなわち自身の一族を戯画的にほめかしつつ自己を表出するという、紫式部の志向性をとらえている。

つづく「第二章 紫式部周辺における『源氏物語』摂取」では、紫式部周辺の人々が詠んだ和歌における『源氏物語』引用をふまえ、作者の交友圏（もしくは交遊圏）の実相をとらえている。『源氏物語』をふまえた和歌を詠んでいる人物としては、中宮彰子、一条天皇、彰子付女房たち、さらには紫式部の次世代の人々（たとえば紫式部の娘、大式三位と男性官人）などがとりあげられる。特に本章で強調されるのは、これらの人々の間で『源氏物語』が果たしている、紐帶的な機能である。

以上、本論文の内容と特質についておおよそ整理してみたが、『源氏物語』の引用を論じた多数の先行研究に比しても、本論文は次の三点において特にプライオリティを有しているものと判断される。

- ・『源氏物語』注釈の歴史は八百年以上にわたる。現存最古の注釈『源氏釈（伊行釈）』以来、さまざまな和歌引用、歌謡引用などについてはほとんどが指摘済みであり、さらに近年は『源氏物語』の和歌と和歌的表現に関する研究がかなり盛んになっている。そうした中で、本論文の第一部では、特に女君の造型に関わる和歌、歌謡などの引用において、従来解析されることのなかった官能性、あるいは〈老い〉にまといつくような諧謔性を読みとることで、『源氏物語』の重層的な表現が明らかにされている。
- ・第二部－第一章で扱われた『為信集』については、近時のまとまった成果として笹川博司『為信集と源氏物語』（風間書房、2010年）などがあるものの、本論文は同書を超えたレベルで多角的に『為信集』なる歌集がどういうものかということを慎重に吟味し、さらにそこから『源氏物語』との関わりについても詳しく考察している。ここまで踏み込んだ考察は初めてのこと

といえよう。

- ・第二部－第二章でとりあげられた『源氏物語』を引用する和歌についても、先行研究で検討されてきたものの、物語文学をテキストとして読むという研究方法が隆盛した1970年代後半以降は研究の進展があまりみられなかった。本論文は、単なる引用の指摘にとどまらず、物語作者紫式部の交友圏（もしくは交遊圏）についての研究として新しさを有している。特に、第二章－第二節の礎稿となった学会誌掲載論文は、昨年、複数の学界時評において高く評価されていることから、この点は確実であろう。

公開審査会においては、審査委員より、特に書き下ろしの部分が大半を占める第二部に対する質問と意見が相次いだ。新しい成果として価値を有するものの、たとえば、特に十世紀後半から『源氏物語』が成立する十一世紀初頭において和歌あるいは歌語が具体的にどのように流通していたのか、流通している場合はどのような書物などに依拠していたのか、またそうした流通の成り立つコミュニティはどういうものか、といった点について、今後のさらなる検討が望まれるという意見が出された。また、『為信集』については、享受・流通の実態を明かにすることはきわめて困難ではあるが、少なくとも流通した可能性を考えながら議論を深められるのではないかと、いう指摘もあった。

以上のように、これから考察を深めてゆくべき点はいくつかのこされているものの、既に学界において高く評価されている学会誌掲載論文などをベースにしながら、総じて丁寧かつ緻密な考証に基づき、これまでの注釈および論考がとらえきれていなかった諸問題を明らかにしているの、本論文が課程による博士学位論文として十分にふさわしいものと判断した。

2014年1月17日

主任審査委員	早稲田大学	文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	陣野 英則
審査委員	早稲田大学	文学学術院	教授		兼築 信行
審査委員	早稲田大学	教育・総合科学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	
					福家 俊幸

和歌における『狭衣物語』 撰取の研究

—— 藤原定家を軸に ——

博士論文執筆者：江 草 弥由起

十二世紀以降、和歌の表現史においては物語撰取が盛行する。その中心となったのは、物語の中で早くカノン化した『源氏物語』であることは言うまでもない。従来の和歌における物語撰取研究は、『源氏物語』を中心に展開してきた。『源氏物語』に続いて和歌にまとまった影響を与えた作品に、平安後期に創作された『狭衣物語』を挙げるのは、異論の無いところであろう。特に藤原定家における『狭衣物語』撰取については久保田淳をはじめとする和歌研究者により具体的な指摘がなされてきた。本論文は、『狭衣物語』を中心に据えた時、どのような和歌表現の歴史が見えて来るかを主想として、独自の調査・考察を行ない、藤原定家を基軸としながら、より幅広く平安後期～中世期の表現史の展開を視野におさめた立論を目指したものである。

全体は二部構成となっており、第一部は藤原定家が編纂した『物語二百番歌合』の問題を扱う。同歌合は、源氏物語の和歌と他の物語の和歌とを左右として番えるという、物語享受史上極めて注目すべき作品だが、その前半部は右方に『狭衣物語』歌を配したものであり、いわば同物語のステイタスの高さを証する基点と位置付けられるからである。第二部は、撰取の具体的な事例を追った論考、さらに方法についての考察を展開する。

第一部「『物語二百番歌合』の基礎的研究」は、三章から成る。第一章「構成」では、当該歌合全体の基礎的事項を確認したうえで、その採歌状況およびその傾向について仔細に検討した。その結果、このテキストはもとの物語と読み合わされることを前提に編纂されているとの新しい見解が示されている。このことは、定家自筆本奥書に記されている、宣陽門院御本の提供を受け編纂されたという記述の重要性を、大きくクローズアップさせるところとなった。

そこで第二章「成立」では、宣陽門院の周辺を探り、従来通説的に考えられていた建久期の成立説を退け、女院の後見者であった源通親が没した後で、定家への編纂下命者である藤原良経の没以前、すなわち建仁2年～建永元年の成立とする新しい説を提示した。政治状況や後鳥羽院との関係など、当該歌合のもつ政治性を示唆する論となっている。

さらに第三章「受容と展開」においては、美しい料紙で知られる伝藤原為家筆の当該歌合断簡である姫路切を扱い、書誌的な検討や、同様の料紙に書写された後撰切を比較対象に据えること

で、このテキストが鎌倉期の高貴な女性のもとで賞玩されていた可能性を示唆している。第一章、第二章の結論を古筆切資料の検討から補完する行き届いた展開である。さらに絵画資料としてフランクフルト本『源氏狭衣物語絵巻』を取り上げ、分析を行い、本絵巻が『物語二百番歌合』を参考にした可能性があることに言及した。歌合に見出すことのできない要素も存するが、『狭衣物語』享受の一齣としても、貴重な在外資料の報告となっている。以上、第一部は『物語二百番歌合』を根本的に再検討し、新たな成立論を示し、従来検討されてこなかった資料にも目を向けた点で、研究上の大きな進展を示したものと評価できる。『源氏物語』の側に重点が置かれてきたこの歌合について、『狭衣物語』を対とし、『狭衣』側から照明を当てたところが新しいアプローチと評価できる。

第二部「和歌における『狭衣物語』摂取」は三章から成る。『物語二百番歌合』の編者定家とその同時代歌人、すなわち新古今時代の歌人、および中世の後代歌人たちの詠作から、表現分析を行っていく。第一章「地名表現の摂取」では、飛鳥井、常磐の森、虫明という、『狭衣物語』の飛鳥井の女君に関わる重要地名の系列を取り上げた。すなわち女君の名称、居所、入水に関わる地名ということになる。飛鳥井自体は催馬楽の影響の強い結果が出たが、名所題として常磐の山が森に変化・定着した背景に、当該物語の関心の高さの表出を見ている。異論が無いのは虫明で、新古今期には、和歌の場面設定自体が強く『狭衣物語』に依拠していることが首肯される。いわゆる歌枕の展開において、物語との関係が限定的かつ突出して確認できることは、和歌史的な関心のありようの実態を明確に示す、ひとつの典型的事例と捉えることができるだろう。丁寧な用例検索と分析とが提示されている。

第二章「作中歌の摂取」では、『狭衣物語』の作中人物のうち源氏の宮、飛鳥井の女君、女二の宮の詠歌が主に新古今時代歌人によってどのように注目され、摂取されたかを分析した。

第三章「『狭衣物語』摂取の方法」は、前二章が物語に即し素材化された要素を取り扱ったのに対して、摂取した歌人ごとの特質を解析している。第一節は定家、第二節は定家同時代、第三節は定家後と分節されている。定家は初学期から晩年まで摂取例を拾うことが可能で、その方法的展開と深化とを跡づけることがある程度可能だが、具体的な作品分析を細かく行っている。定家と同時代歌人としては、藤原良経、俊成卿女、藤原家隆、後鳥羽院、源通具について述べた。良経は『物語二百番歌合』の製作下命者であり、特に注目されるが、歌人ごとの歌風分析については、さらに実証的な理論化が望まれる。定家後については、新古今期以降『狭衣物語』摂取は減少し、『源氏物語』注釈書『仙源抄』の著者長慶天皇と、定家を尊崇したことで知られ膨大な詠歌を残す正徹に、摂取が認められることを明らかにしている。ここで明らかになった摂取の減少という現象を如何捉えるか、公開審査会の場においても議論となった。『狭衣物語』には異本が多く、そのことが当該物語の文学史的あり様にどのような意義を見出すべきなのかという問題である。論者は、異本の多様さ自体が『狭衣物語』がよく享受された証左と述べた。

近年、『狭衣物語』研究は進展しつつあるが、和歌の立場から論ずる研究は殆ど見られなかった。その意味で、本論文の指し示す地平は斬新だが、この研究から今度は『狭衣物語』をどう見るかという視点も、今後の研究展開においては意識されるべきであろう。

以上、本論文は、その作中歌が高く評価された『狭衣物語』が、和歌史にどのような影響を与えたのかを通時的に検証しようと企図された研究成果である。そのキーパーソンは間違いなく藤原定家であり、論文題目自体にそのことが的確に表されていることを指摘しておきたい。『物語二百番歌合』について新説を加えるとともに、数多くの撰取事例を見出して分析することで、和歌ならびに物語享受史研究を着実に進展させるものとなった。

博士（文学）の学位を授与するに相応しい水準を達成した論文と認められる。

2014年1月17日

主任審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	兼築	信行
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	高松 寿夫
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	陣野 英則
審査委員	ノートルダム清心女子大学	名誉教授	文学博士（早稲田大学）	赤羽 淑

内田不知庵研究

——明治二〇年代前半における批評家内田不知庵の文学活動および文学論に関する研究

博士論文執筆者：大 貫 俊 彦

本論文は、大学院文学研究科博士課程進学時から申請者が取り組んでいる内田不知庵の文学活動についての研究をまとめたものである。一般的には内田魯庵の名で知られている不知庵だが、明治20年代から昭和初年代にかけて長く活躍したその文学経歴において、主に「不知庵主人」の号で文芸批評を始めてから、明治25年にユニークな文学論『文学一斑』を刊行するまでの時期の文業の詳細は、必ずしも明らかではなかった。申請者はその時期に注目し、内田不知庵の文学思想の根幹を、同時代の文学の動向と関連付けながら考察している。埋もれていた早稲田大学図書館・演劇博物館所蔵の資料に、新たな照明を与えつつ、不知庵の評論を論じたことにより、新しい達成が見られたのも注目に値する。

「序章 内田不知庵（魯庵）研究概観および本研究の課題と方法について」では、これまで先人の研究によって魯庵像が作られて来たが、その多くは魯庵自身の回想によっており、正しい魯庵の文業を明らかにしていないとする。正しく評価することにより、初期不知庵時代の文学活動に、更なる評価を与えられると主張する。

本論は全11章からなるが、そのテーマから言うと、「文芸批評家内田不知庵の登場について」（第一章）、「初期小説について」（第二章・第三章）、「初期評論・文学観について」（第四章～第六章）、「武蔵屋叢書閣と不知庵について」（第七章・第八章）、「内田不知庵・田辺花圃の往復書簡について」（第九章・第十章）、「『文学一斑』—〈ドラマ〉論の射程について」（第十一章）の6つの部分に分けられるだろう。以下1章ごとに、成果を概観して行きたい。

「第一章 文芸批評家、内田不知庵の「出発」—明治二〇年代初頭の批評言説と批評第一作「山田美妙大人の小説」をめぐる—」は、山田美妙個人に宛てた書簡が、一篇の批評としてどう独立したかが辿られている。その文章に見られる多義的な修辞技法の使用に、不知庵の観察眼の卓越性を見ている。

「第二章 共鳴する裏屋の響き—内田不知庵「酒鬼」論—」は、小説の代表作『くれの廿八日』に至るまでの道において、最初期の小説がどうであったのかをていねいに辿る。従来注目されて来なかった「酒鬼」をとりあげつつ、都市整備と禁酒運動という世相を絡めて論じ、批評の試み

だけでは見えて来ない小説観に触れている。

「第三章 内田不知庵「もみぢ狩」論—典拠と小説の構成について」は、作品の典拠が、従来言われている謡曲だけではなく、式亭三馬の作品も取り込んでいることを実証する。更に、小説世界に「悲惨憂愁」の観点を導入したことを論じている。

「第四章 「強硬」な不知庵—『浮城物語』論争における内田不知庵の「小説」の保持」は、明治初期の代表的な文学論争である、「文学極衰」論争、『浮城物語』論争を分析した一章である。修士論文で矢野龍溪を扱っていた論者ならではの読みが、よく生かされている。

「第五章 「巻を掩ふて嘆ずる」不知庵—明治二三年の書簡からみるドストエフスキー『虐げられた人びと』の読書体験と批評の変化」は、不知庵のドストエフスキー体験を論じた力作で、英語版『虐げられた人びと』を読んで、不知庵の心情がどう揺れ、文学の根本への眼が生まれたかの内実を分析する。

「第六章 「三日月」に見出す〈詩〉の材—明治二四年、内田不知庵が村上浪六の登場に見た「小説」の可能性と危惧」は、「詩（ポエトリー）」という概念が、写実の奥にある「文学の真の価値」のことを意味していることを論じて、村上浪六登場時の文学状況に触れている。

「第七章 内田不知庵と武蔵屋叢書閣—「武蔵屋本」出版事業と〈ドラマ〉論」「第八章 内田不知庵と武蔵屋本『傾城買二筋道』」の二章は、出版批評に関係した不知庵が、「ドラマ」という観点から近松の世話浄瑠璃を高く評価していることの意味を論ずる。また、武蔵屋本の一冊である梅暮里谷峨『傾城買二筋道』をめぐって、その「緒言」が不知庵筆と推定し、時代の中で意味付ける。折から、北村透谷の批評活動も絡み合い、現在からみると問題が多い内実が辿られる。

「第九章 田辺花圃あて内田不知庵書簡の再検討—早稲田大学中央図書館蔵三宅花圃書簡との復元へ向けて」と「第一〇章 内田不知庵宛田辺花圃書簡の翻刻と紹介—早稲田大学中央図書館蔵三宅花圃書簡との復元へ向けて（二）」は、資料探索の力が発揮された部分だと言えよう。二人の人のがらの違いがよくわかる書簡で、しっかりと論じられたのは手柄である。

「第十一章 内田不知庵『文学一斑』論—「道義」の媒介性から捉える〈ドラマ〉論の射程」は、不知庵の言う「ドラマ」を成立させる契機としての「道義」に注目、ヘーゲル美学との関連にも留意し、『文学一斑』の内実に迫る。論ずるのが難しい一冊だが、どういう論点から構成されているかが明らかになったと言えよう。

最後に置かれた「終章 本研究の成果と課題—「内田不知庵研究」総括」は、これまでの論旨を振り返り、今後への展望を描いた部分であり、これまでの研究成果を確認し、残された部分を論者自身が確認しており、研究への誠実さがうかがえると言えよう。

「不知庵」時代に限定し、対象を絞ったことは賢明だが、結果的にその後の「魯庵」時代とどうつながるのかについての展望が今一つあいまいになったことは否めない。論者の内田魯庵に対する全体像がもっとはっきりしたならば、この時期の研究の意味も更に明らかになったであろう

とおしまれる。また、明治二〇年代の文学状況に眼を向ければ、いくつかの課題も出て来よう。同じように小説論・ドラマ論を展開した坪内逍遙との関係に限っても、まだまだ考えてもいい点は多いように思われる。しかし、これまで著作集が刊行され、作品がある程度まとまっていた文学者ではあっても、野村喬氏らわずかな研究者によってしか再評価されなかった内田魯庵の研究に、本論文は確実に進展をもたらしたのは事実であり、その努力は高く評価出来る。資料の発掘においても、研究をリードする成果を挙げている。よって、本論文は、「博士（文学）」の学位を授与するのにふさわしい業績であることを認定する。

2014年1月25日

主任審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	中島 国彦
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授		高橋 敏夫
審査委員	早稲田大学政治経済学術院	教授		宗像 和重
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	十重田裕一
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	鳥羽 耕史

夏目漱石文学の研究

——鏡の表象と「うつし」の文学

博士論文執筆者：解

璞

本論文は、申請者が「早稲田大学アジア特別奨学生」という資格で来日し、文学研究科博士課程で研鑽を重ねて完成した夏目漱石に関する研究論文である。北京大学大学院修士課程時代から、申請者は夏目漱石の作品に関心を寄せ、先行研究を博搜し、新しい視点を打ち立ててきた。作品の内的構造を、「それから」では世代や性差によって分析する試みもみられたが、来日してからは、「鏡」という視点に着目、「鏡」という表象が如何に描かれ、時代と共にどのように変容したかを研究の中軸として来た。漱石作品には、小道具として「鏡」がよく登場するが、申請者はただ単なる物としての「鏡」に注意するのではなく、「鏡」を比喩的なものとして捉え、その表象に見える重層性に注目する。だから、「うつし」ということも、「映し」「顕し」「移し」などと、多様な意味合いで考えられて来るわけである。長い研究史の積み重ねのある漱石研究では、新視点の提出は大変な作業となるが、申請者はそれに挑み、多くの成果をあげたと言える。

本論文は、「第一部 うつす文学」「第二部 うつされる文学」の二部からなる。「第一部 うつす文学」は、全六章で、作家以前の文業から、晩年の作品まで主要作品の作品研究を展開する。自己と他者、自国文学と外国文学との緊張関係による自己像の不安定さにこそ、漱石文学の端緒があると考えてるのである。

「第一章 最初期の夏目漱石文学における「顔」と「鏡」―『木屑録』と『倫敦消息』論」は、従来関係づけられていなかった初期の二作品の関係を、「顔」と「鏡」から分析し、前近代から近代へ、東洋から西洋へ、象徴から写実へという変容が、漱石の作家的出発と深いつながりがあるとする。

「第二章 鏡と時間―夏目漱石『菫露行』論」と「第三章 「菫露」から『菫露行』へ―夏目漱石における詩と散文」の二篇は、初期の問題作『菫露行』を取り上げ、そこに「鏡」と「時間」の問題が隠されているとし、更に漱石における「詩と散文」のジャンルの融合をここに見る。西洋文学や視覚芸術の側面から論じられる作品だが、「漢詩」と「英詩」の接点という視点から考えたことは、新しい視点として注目される。

「第四章 『草枕』の「ユートピア」と一人称―鏡としての語り手について」は、作品の丹念な

読みを通して、一人称が変化する部分があることを見出し、一人称単数から一人称複数への変化が、語り手「余」の見る現実とどう関係するかが跡付けられている。語り手の位置は必ずしも確かではなく、人称の揺れからもわかるように、矛盾した二つの面を持っており、こうした「鏡」のような一人称の語り手のダイナミックな映し方に『草枕』の魅力がある、としている。短い論文だが、問題提起は鋭い。

「第五章 『夢十夜』『第八夜』における鏡と夢—『鏡の国のアリス』との比較を通して」は、「鏡」の重層性を最もよく示す連作『夢十夜』から、とくに「第八夜」に着目し、キャロルの『鏡の国のアリス』との比較を試みた論である。「第八夜」では、現実と夢の境界があいまいになっており、真と偽、意味と無意味を判断する基準が揺れているとし、「第八夜」の「鏡」の機能にも論点を及ぼしている。

「第六章 『門』における宗助の言語活動—参禅の意味を問い直す」は、主人公宗助が参禅体験を契機に、独りごとの閉じられた世界から、音声言語を駆使出来るようになり、自己の起源に眼を向け、言語活動を再生出来るようになったのだと論じている。参禅が、宗助が「何もしない」鏡になろうと「する」ことではないか、と考えた点は、興味深い。

以上の作品研究は、長い研究史を踏まえつつ、新たな視点を提出しようとした冒険に満ちた論考群であり、申請者の努力が実った部分と言える。晩年の作についての論考も、今後期待される。

「第二部 うつされる文学」は、全四章で、漱石作品を最初に中国語訳した魯迅に照明を当て、漱石と魯迅の比較文学的考察を深めた部分である。

「第七章 夏目漱石文学最初の中国語訳について（一）—魯迅訳「懸物」の成立を中心に」と「第八章 夏目漱石文学最初の中国語訳について（二）—魯迅訳「懸物」の本文を中心に」は、漱石の『永日小品』の中の一編「懸物」をめぐって、興味深い考察が見られる。漱石文学の最初の翻訳が魯迅によってなされた背景を辿り、そこに時代の意味を考えている。特に「懸物」翻訳の背景には、中国の文壇における「小品」ジャンルへの関心があったことを紹介しているのは重要である。更に、魯迅の翻訳の特色を指摘し、原文の口調を尊重した魯迅の精確さを具体的に分析している。

「第九章 夏目漱石『夢十夜』と魯迅『野草』における表現不安の表現方法—「第七夜」と「死後」を中心に」は、『夢十夜』『第七夜』と魯迅の『野草』の一編「死後」の間に、夢における不安の表現方法において関連が見られるとし、しかし各文章の結末においては、向う方向のずれが見られると論じている。

「第十章 『幻影の盾』と『鑄劍』における東西古典を書き直す表現方法—夏目漱石と魯迅における自国文学と外国文学」は、漱石の『幻影の盾』と魯迅の『鑄劍』を比較しつつ、物語の空間の神秘さの処理を問題にする。

最後に「終章」が付けられ、「鏡」の表象を通して漱石文学を新たに見直して来た本論文の達

成を確認している。また、漱石『永日小品』全編の中国語訳が添えられている。これまで一部は、中国語訳が存在するが、申請者の手によって新たに全訳が試みられたのである。

留学生にとって、漱石は研究の対象として非常に重い存在であるが、申請者は研究史を踏まえ、従来見逃がされていた作品や文献を跡付けつつ、漱石の問題作に一定の解釈を与えることに成功している。確かにまだ論じられていない漱石の代表作は多いが、「鏡」の視点で全体を一貫した努力は高く評価されよう。魯迅との比較も、従来の文化史的・歴史的な比較ではなく、表現に即した具体性があり好感が持てる。惜しむらくは、同じように「鏡」を用いて達成を見せている芳川泰久氏の漱石論をどう乗り越えるのかが明確でない点、漱石の『文学論』の分析がもっと欲しい点、「表象」の概念が必ずしも明確でない点、「うつす」「うつされる」の関係をもっと深めてほしかった点など、申請者に期待したい点は多い。しかし、論文の日本語として、確かな日本語表現を打ち立てており、査読を経た学術論文が3点以上あり、全国的な学会での研究発表も2回こなしており、その成果は充分である。今後の漱石研究において注目される部分も見られ、更なる成果が期待される。よって、本論文が、「博士（文学）」の学位を授与するのにふさわしい論文であることを認定する。

2014年1月25日

主任審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	中島 国彦
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授		高橋 敏夫
審査委員	早稲田大学政治経済学術院	教授		宗像 和重
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	十重田裕一
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	博士（文学）早稲田大学	鳥羽 耕史
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授		千野 拓政

金史良日本語小説期研究

博士論文執筆者：郭 炯 徳

本学位請求論文は、植民地朝鮮出身の作家、金史良（一九一四年～一九五〇年）が日本語小説を書いていた時期（一九三三年～一九四三年）のほぼ十年間を対象に、生活史および表現史両面を三つの観点から調査、研究したものである。まず、本論文の三つの観点とその主な成果についての概評からはいりたい。

第一は、日本滞在期間の足跡の丹念な掘り起こしである。とりわけ、東京帝大時代におけるハイネ研究の意義、卒業論文タイトルの確定、作品が集中的に書かれた鎌倉の鉱泉旅館「米新亭」の実態など多くを明らかにした。

第二に、従来「光の中に」「天馬」など主要作品に偏り、かつ植民地政策への反発の観点から主に評価されてきた日本語小説群を、同時代の文学状況（「昭和十年代文学」）の中で捉えようとしたことである。主たる文学状況として、「外地ブーム」「文芸統制」「戦争ものの流行」などがあげられ、金史良文学への文壇的な注目がこうした状況下でたかまったことが明らかにされた。

第三に、金史良のダイグロシア（二言語使い分け）状態を見すえ、そこに独特な言語的葛藤と傾向を浮び上がらせようとしたことである。ここに、金史良の日本語小説の生成過程が明らかになった。

以上の三つの観点からの研究によって、「光の中に」などから「太白山脈」までの日本語小説群が詳細な検討を加えられ再評価され、また、小説における朝鮮人のディアスポラ状態への注視、「在日朝鮮人作家」主導の戦後の金史良評価史の意味づけなどがなされた。

いずれも、従来の金史良研究では手薄であったり、欠落していたものであり、これらの成果は大いに評価される。

次に、四部構成の本学位請求論文を、第一部から順に概観したい。

「第一部 金史良の日本体験とその文学——東京帝国大学時代から朝鮮への送還まで」は以下の三章からなる。「第一章 金史良の東京帝国時代——ドイツ文学、および『光の中に』とのかかわりを中心に」は、学部入学から卒業までの軌跡を実証的に解明、卒業論文のハイネ論の検討

から、日朝民族間の問題を「混血児」をとおして追究した「光の中に」の意義までをたしかめている。「第二章 金史良の日本文壇デビューから『米新亭』時代まで」は、雑誌「文藝首都」同人になったいきさつから、「文藝春秋」進出までの活動をまとめつつ、不発に終わった演劇・映画界への進出模索をたしかめ、さらに東京での居住地の特定、鎌倉の旅館滞在の模様を現地で調査している。そして、「第三章 『虎の髭』から見る金史良の創作傾向分析」では、従来の研究では言及されることがなかった作品「虎の髭」をとりあげ、そこでの苗字の呼び方をめぐる葛藤の問題を、「光の中に」「光冥」との比較を通して解明している。

「第二部 金史良文学における『地方』／「植民地」認識の行方」は、以下の四章からなる。「第一章 戦時期の『外地ブーム』と芥川賞の中の地方認識——『植民地』から『地方』への認識変貌をさぐって」では、昭和十年代における「内地文壇」の文芸統制、戦争文学の氾濫、「外地ブーム」をめぐるローカリティー談義などを検討することで、金史良が活動した戦時期の文化的見取り図を提示している。「第二章 『光の中に』における『啓蒙』と『贖罪意識』の亀裂」では、「南先生」と「春雄」の關係に焦点を当て、先生の心理が恐怖から愛情へ、罪悪感から贖罪意識へと変る過程を明らかにしながら、先生の場所の移動と関係付けて論じている。「第三章 『天馬』における『モデル問題』再考——昭和十四年前後の京城における『内鮮知識人』の行方」では、従来モデルとされてきた人物を検討し、複数のモデルが存在していることを明らかにしている。「第四章 金史良の日本語小説における移住問題」では、日本語小説を「移住／離散」という観点から捉えなおし、湯浅克衛の諸作品との比較を試みている。

「第三部 金史良の日本語小説における改作・翻訳過程研究」は、金史良の日本語小説の改作過程を、異言語間（朝鮮語→日本語）の言語変換（翻訳、改作）において捉えた。「第一章 『土城廊』 版本比較研究——運命論的な世界観の行方」、「第二章 『草探し』における『異民族言語』の絶え間——『翻訳』された植民地奥地紀行」、「第三章 『山の神々』改作過程研究——作為としての『国民』の一人」、「第四章 『郷愁』における『東洋』と『世界』」の四章からなる。

「第四部 『植民地』から『亡命地』へ」は、金史良の日本語小説を「マイナー文学」（ガタリ）と規定し、「大東亜戦争」前後の、「故郷・郷土物」と「ユートピア」への志向を示した「国策文学」、そして中国に脱出して書いた作品を分析している。「第一章 『大東亜戦争』前後の金史良文学における『故郷』と『ユートピア』表象をめぐって」、「第二章 『記憶』と『記録』の再編成をめぐって」、「第三章 金史良文学と『在日朝鮮人文学』」の三章からなる。

ここに集められた多くの論文は、すでに日本の研究誌（査読誌を含む）および韓国の研究誌（査読誌を含む）に発表され、高い評価を得ている。こうしてまとめられたことで、よりいっそう意義深いものになったといえよう。

それを認めたうえで、今後論じねばならぬ問題も少なからずある。金史良文学全体の再評価を

どういう方向で行っていくか、その再評価の中で「日本語小説期」をどう位置づけるのか。解放後の作品をどう捉えるのか。こうした大きな問題に加え、佐賀高等学校時代の位置づけや、昭和十年代文学状況のいっそうの分析、最新の文献、資料への言及、また小説偏重であることの是正（詩やエッセイの検討）、やや評論的で不分明なタイトルの修正などが求められよう。そして、金史良文学が、他の植民地出身作家の文学とどう関係するのか、も重要な検討課題である。

こうした検討課題が明確になるのは、本学位請求論文の本質的な欠陥ではない。達成が明らかなくゆえに、さらに豊かな成果が求められるのである。郭炯徳氏の調査能力、日本語能力はきわめて高く、そして、現在の文学・文化研究の状況とその理論的背景への理解も優れている。一年半のコロンビア大学の留学は、研究方法の問い直し、新たな関心に役立っている。

本学位請求論文は、現在日韓で同時進行中の金史良研究の更なる進展に大いに寄与するはずである。

以上の点から、審査委員一同、本学位請求論文が、「博士（文学）」を授与するに十分値するとの結論に達した。ここに報告する次第である。

2014年1月25日

主任審査委員	早稲田大学文学学術院	教授	高橋 敏夫
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授 博士（文学）早稲田大学	中島 国彦
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授 博士（文学）早稲田大学	十重田裕一
審査委員	早稲田大学文学学術院	教授 博士（文学）早稲田大学	鳥羽 耕史
審査委員	早稲田大学政治経済学術院	教授	宗像 和重
審査委員	早稲田大学名誉教授		大村 益夫
審査委員	九州産業大学教授	文学博士（東国大学（韓国））	白川 豊

平安時代中期までの和文における笑い

——『源氏物語』を中心に——

博士論文執筆者：金 小 英

本論文は、平安時代前期から中期までの和文（特に散文作品）における笑いがいかなるものかということを論じている。その研究対象の中心は『源氏物語』であるが、『源氏物語』以前、すなわち平安中期までの和文における笑いがいかに展開しているのか、ということもあわせて論じられている。全三篇、計八章からなり、全体の分量は四〇〇字詰原稿用紙換算で六〇〇枚強である。まずは、その論文の内容と特質を整理する。

「第一篇 平安前期の和文における笑いの諸相」では、特に西欧の多様な「笑い」論を整理しつつ、それらを平安前期和文の笑いの分析に援用することで、平安文学研究におけるこれまでの議論を相対化し、かつ新たな見方を示している。「第一章「笑い」論の展開と文学における笑いの領域」（副題略す、以下同）は、本論文の基礎論に相当するものであるが、プラトンなどの西欧古典から近代以降の優越理論、不調和理論、解放理論、さらにはベルクソン、フロイト等々の論などもふまえて、文学における笑いの領域を見定めようとしている。さらに後半では、和文の具体例を挙げながら、「滑稽」「諧謔」「機知」「諷刺」「皮肉・反語」「パロディ」といった範疇に分けて平安時代の和文における笑いの領域をとらえている。つづく「第二章『土佐日記』の方法としての笑い」は、笑いに関わる表現が多くみられる『土佐日記』を対象とする。これまでも『土佐日記』における諧謔的な表現はたびたびとりあげられてきたが、個別の表現に特化して論じられる傾向がつよかったため、『土佐日記』における笑いの全体像の把握は充分ではなかった。ここでは便宜的に「機知的言葉遊び」「揶揄・諷刺」「滑稽・諧謔」の三つに分け、第一章の基礎論に照らしながら『土佐日記』の笑いの方法が西欧古典以来の「笑い」論に照らしてみてもきわめてレンジの広いものであることを明確に示している。あわせて、仮名日記という形式ならびに非日常空間の設定と、笑いの方法との相関関係についてもとらえている。

次の「第二篇 平安中期までの「人笑へ」言説」は、特に他者に対する恥の意識をあらわす「人笑へ」（また「人笑はれ」もふくむ）に関する研究である。平安中期にいたるまで用例数がきわめて少なかったこの言葉は、『源氏物語』で飛躍的に多く用いられるようになり、しかも物語の鍵語と見なされるほど重要な意味をになうようになる。よって『源氏物語』の「人笑へ」論は既

に多くあるのだが、「第三章『竹取物語』における「人笑へ」言説」では、あえて用例がまったくない『竹取物語』の貴公子五人の求婚譚末尾に着目し、『源氏物語』の「人笑へ」の特徴から逆照射することで、『竹取物語』においても恥意識を基調とした「人笑へ」に相当する言説が見いだされるということを論じる。さらに「第四章 平安中期までの「人笑へ」のありよう」では、『源氏物語』までの「人笑へ」の用例を逐一検討している。『源氏物語』の「人笑へ」については「倫理的な規矩」（鈴木日出男）とまで評されているが、それ以前ではさほどの制御力を持っているわけではなく『源氏物語』において深化・拡充されていること、しかし一方で『源氏物語』の「人笑へ」は『竹取物語』の求婚譚を貫く思考と軌を一にしているということを主張している。

四つの章からなる「第三篇『源氏物語』の諧謔性と笑い」は、『源氏物語』に関する笑い論である。「第五章 頭中将と光源氏」は「雨夜の品定め」の寓意性をとらえながら、頭中将の人物像の変貌を指摘してきた過去の議論を批判する、画期的な頭中将論といえる。「第六章『源氏物語』における「女」と「仏」」は、さまざまな平安時代の文学作品において人を「仏」になぞらえる場合、ほとんどが男性（しかも尊い法師など）に限られるのに対して、『源氏物語』では女性と「仏」を重ねるという珍しい表現が散見されることに着目し、そこに諧謔性があらわされ、さらには「仏」の権威を無化するような効果がみられることを明らかにした。「第七章 玉鬘十帖の笑い」では、玉鬘をめぐる物語の前半部で活躍する大夫監、豊後介、女房三条らの鄙性、無知、頑固さ等々の笑いをもたらし面が、玉鬘の美質の背後にひそむ一面へと通じてゆくことを論じている。鄙の地で生育した玉鬘のもつ負性のみならず、その「わららか」な性格の由来をも明らかにしている。「第八章 男女関係に用いられる「たはぶれ」の一考察」では、これまで「たはぶれ」という言葉の大半が「遊び興じること」もしくは「冗談」などと解されてきたことに疑問を呈し、かなり多くの用例が男女の（みだらな）関わりをあらわしていると解すべきことを実証すべく、多数の用例をとりあげて詳しく検討している。

以上のように整理してみたが、本論文は次の三つの点において特に価値を有しているだろう。

- ・ 笑いに関する表現が個別に検討され、論じられることは多くあったが、平安時代文学の笑いについて、西欧の「笑い」論の展開をおさえ、それに照らしながら包括的な検討がなされることはなかった。本論文は平安時代中期までの主要作品全般におよぶものではないので、まだ包括的とはいいがたいが、そのような検討を試みた論として評価されるべきであろう。
- ・ 第二篇の「人笑へ」論は、用例のない『竹取物語』の中から「人笑へ」に相当する言説を読みとるという方法で、『竹取物語』から『源氏物語』にいたる物語文学史をとらえ直す視座を示した。
- ・ 第三篇の論考では、特に「雨夜の品定め」の意義、玉鬘物語の方法など、従来もたびたび論じられてきた問題を取りあげながら、これまでの議論を更新する新見を示し得ている。

なお、これらのうち一点目と二点目については、論文提出者がダブル・ディグリー・プログラ

ムによりコロンビア大学に留学して、「笑い」論をふくむさまざまな思想、文学理論などを集中的に学ぶとともに、日本におけるオーソドックスな古典文学研究を相対化するような方法を体得した成果といえるだろう。

ただし、公開審査会では注文も出された。まず、和文とはそもそも何か、という視座からの議論を要するのではないかという指摘である。これは、とりあげられている笑いの表現が、いったい誰のために書かれたのか、もしくは誰が実際にそれを読むのかという問題に関わる大きな問題であり、またジェンダーに直結してくる問題でもある。今後は意識的にとりくむ必要があろう。さらに、それともつながる問題として、漢文日記と仮名日記とのかかわりも重要であるが、本論文ではそのような対比と検討は不充分といわざるをえない。一方、第四章の「人笑へ」、第八章の「たはぶれ」の検討については、多数の用例をとりあげてはいるものの、現時点での考察が十分に熟していないことは否めないだろう。

このように、今後のさらなる深化、あるいはよりひろがりのある考察が期待される部分があるのだが、総じて、平安前期から『源氏物語』にいたるまでの和文における笑いについて新たな見解を提示していると認められることから、本論文を課程による博士学位論文にふさわしいものと判断した。

2014年1月17日

主任審査委員	早稲田大学文学学術院 教授 博士（文学）早稲田大学	陣野 英則
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	兼築 信行
審査委員	早稲田大学教育・総合科学学術院 教授 博士（文学）早稲田大学	福家 俊幸

黙阿弥の研究

——江戸の善人と悪人——

博士論文執筆者：埋 忠 美 沙

埋忠美沙氏の「黙阿弥の研究——江戸の善人と悪人」は、狂言作者河竹黙阿弥を対象とした学位請求論文である。河竹黙阿弥の作品は、大正から昭和戦前にかけて『黙阿弥脚本集』『黙阿弥全集』によって一応の整理がなされ、舞台の上でも今日に至るまで上演され続けているものが多い。しかし、黙阿弥を対象とする博士論文は必ずしも多いとはいえず、埋忠氏の研究によって、今後さらに黙阿弥研究が深化することが期待される。

本論文は、幕末までの黙阿弥作品を取り上げ、様々な角度からの検証を試みており、その方法の多彩さがひとつの特色となっている。以下、各章について、具体的にみてゆく。

「はじめに」を踏まえた第一章「黙阿弥の江戸と明治・大正」は、今日までの黙阿弥研究史をたどりながら、その過程であらわれた視角や論点を検証する。今日に至る黙阿弥評価の礎石を築いたとも評しうるのが、「江戸演劇の大問屋」という評言を与えた坪内逍遙であることは衆目の一致するところであるが、本論では逍遙の言説を子細に辿り直すことによって、逍遙の黙阿弥評価の背景や、逍遙が黙阿弥描く悪人について特段の言及をしていないなど、従来にない視点を提供している。さらに大正期では、黙阿弥家の養嗣子となった河竹繁俊と、黙阿弥家の養嗣子となることを望んだ永井荷風の役割に特に注目し、魅力的な悪人像への注目、白浪ものの悪の讃美といった紋切り型が大正期に成立するであろうとの見通しを述べている。また、戦前戦後で論者の視角が、内容面から様式・表現の面へと移ってゆくといった指摘もなされている。

第二章「嘉永の河原崎座——黙阿弥の初期作」では、「都鳥廓白浪」「吾嬬下五十三駅」の二作品を取り上げて検討している。「都鳥」では、従来の翻刻台本では知られていなかった部分に着目し、台本を補う正本写草双紙にも目を配りつつ、番付資料の精査にもとづく場面の検討、演出の検討を行っている。「吾嬬下五十三駅」については、五十三駅ものの系譜をたどりつつ、曲亭馬琴の読本『頼豪阿閼梨怪鼠伝』との比較から、作品の特性を検証している。

第三章「安政の市村座——小団次との提携」では、「鼠小紋東君新形」「敵討噂古市」「三人吉三廓初買」の三作品を取り上げている。「鼠小紋」については、役者絵を精査し、上演前に出たもの、上演後に出たものの区別から、正本写草双紙など、種々の絵画資料をつきあわせることで、

作品構想がどのように完成してゆくかという、その過程を追っている。「噂古市」については、講談での先行作との比較を通して、講談・落語と共通の話型を劇化する際の共通点などをあぶり出している。本節では、黙阿弥と提携した市川小団次が、悪人と並行して善人役を同一狂言のなかで演じていたことに注目し、黙阿弥描く善人論を展開したところに新しい着眼点がある。「三人吉三」については、大正期以来、お嬢吉三に焦点をあてられていた本作を、黙阿弥作品の構想における小団次の重要性に鑑みて、小団次が演じた和尚吉三から照らし直すことを試みている。ここでも絵画資料を駆使することによって、扮装をはじめとする役の造形過程を検証している。

第四章「文久の市村座——『青砥稿花紅彩画』論」では、市川小団次より下の世代によって主演された作品である「青砥稿花紅彩画」を取り上げて、典拠・演出の面から検証している。ここでは、とくに従来、典拠として知られながら詳細な検討がなされてこなかった、日本左衛門の実録を精査して、典拠研究に新生面を開いている。

以上を踏まえた「おわりに」において、今後の課題について展望している。

本論文の特色として挙げるべきは、演劇研究の各方面において近年開拓された種々の方法を体得し、駆使し得ている点である。

歌舞伎研究においては、1970年代以降、資料整理の時代とされる時期に入り、役者評判記・歌舞伎台本をはじめとする膨大な資料の活字化が推進された。それらが一段落した1990年代半ば以降、コンピュータの導入による膨大な情報処理が可能となり、それ以前から進められていた番付情報の整理と、絵画資料の収集整理が急速に体系化されていった。論者埋忠氏は、そうした情報処理が整った時期に登場した新世代であり、各種の番付の精査から問題点をあぶり出し、膨大な役者絵を並列させることによって、絵画資料の効用を説得力ある形で提示し得ている。この章では、歌舞伎研究において近年進展した上演資料検討の方法と、近世文学研究の方法を軸に論を展開している。さらに、近世文学研究と関連する面では、これも近年進展をみている実録研究の方法をいかしながら、一方では落語・講談など舌耕芸研究の成果も取り入れ、最近、論者自身も加わって研究を進めている正本写草双紙研究の成果も積極的に活用している。論者の幅広い目配りと、精進が反映されているといえよう。

その結果、小団次が悪人だけでなく、融通の利かない馬鹿正直な善人の造形でも個性を発揮したことを高く評価するなど、従来にない視点をもたらしている。黙阿弥作品における初演者市川小団次の重要性は従来から知られていたところながら、黙阿弥の人物造形を舞台上で膨らませてゆくにあたって、小団次がどの時点でどのように関与したか、といった問題を、実証的に追求することを可能にしている点は、高く評価されるべきであろう。

むろん、審査にあたっては、いくつかの問題点も指摘された。

まず、幕末期の黙阿弥の全体像を捉えるためには、なお論及しなければならない作品があるの

ではないか、という点では、多くの審査員の意見が一致した。市川小団次が善悪両面を演じたという点でも、名作とされる「蔦紅葉宇都谷峠」への論及を期待する審査員が多かった。

また、研究方法が多岐にわたる点が魅力ではあるが、それは反面では、全編を貫く論としての力が弱いという一面ももたしているのではないか、という疑念も複数の審査員から提出された。同時代の劇壇状況との対照、同時代の他の狂言作者との方法的比較などの面が薄いという指摘もなされた。作品論、役者論、周辺資料論と、それぞれでの成果を積み上げていることは明らかながら、「黙阿弥の研究」という表題のもとで、来たるべき将来に一書を問うとすれば、それらを総合した視点が要求されることになろう。

しかし、先述するように、これまで必ずしも博士論文という形で大成されてこなかった黙阿弥研究に、新生面をもたらす可能性についても、審査員の意見は一致をみた。黙阿弥を対象とするとなれば、いわゆるアカデミズムの研究論文だけではなく、文芸批評、演劇評論など、膨大な言説を整理した上での黙阿弥論及史をベースにすることが求められることになる。論者の追求は、聳え立つような巨大な壁に取り付いたところであるかもしれぬが、絵画資料研究、舌耕芸研究、実録研究などの知見が、狂言作者研究や演出研究にも有効に応用できることを示したという点で、今後の成果を大いに期待できることは明らかと判断された。

以上によって、審査委員会は、全員一致して本論文に、博士（文学）の学位を授与するに値するものと評価した。

2013年4月27日

主任審査委員 早稲田大学文学学術院 教授

児玉 竜一

審査委員 東京大学文学部 教授

古井戸秀夫

審査委員 武蔵野美術大学造形学部 教授

今岡謙太郎

審査委員 早稲田大学文学学術院 准教授

和田 修

岸田國士前期戯曲論 純粹演劇における「不在」の表象

博士論文執筆者：宮 本 啓 子

岸田國士は日本の近代演劇の発展に大きな役割を果たし、近年再評価の機運も高まっている。しかしながら、これまでの研究は歴史的観点、伝記的観点からのものが主流で、戯曲自体が演劇研究の対象として詳細に検討されてきたとは言い難い状況である。それに対して本論文は、前期戯曲を綿密に分析し、必ずしも具体的に理解されてこなかった岸田の「純粹演劇」の理念を、演劇学的観点から再考したものである。本論文は特に、舞台には登場しないにもかかわらず登場人物たちに多大な影響を与える人物や事物に着目し、その「不在」を中心に戯曲を分析することで、岸田のドラマツルギーと演劇観の特質を明らかにした点に独創性がある。

本論文は三部からなる。以下、各部・各章の内容を要約する。

第1部「脅かす「不在」——自意識と不在」では、戯曲『古い玩具（おもちゃ）』と『屋上庭園』を取り上げ、不在の他者からの視線がいかに登場人物を脅かしているかを読み解き、「純粹演劇」を掲げた岸田がいかなる演劇を目指したかを明らかにした。

第1章「『古い玩具』と「二元論」」では、岸田の第一作目の戯曲『古い玩具』が検討された。本作は、これまでは作者・岸田國士のフランス留学体験に引きつけて、二十世紀前半の海外における日本の知識人の人種的葛藤を描いた戯曲とされてきた。それに対し本論文は、「西欧／非西欧」、「白色人種／有色人種」といった二元論的世界観が実は実体ではなく、登場人物たちの内面化した他者の目として機能していることを指摘した。また、先行研究が主人公の白川留雄を中心に論じてきたのに対し、階層秩序の最下位におかれた留雄の幼馴染の手塚房子に着目し、房子にその二元論を乗り越える可能性を見出した。第2章「『屋上庭園』に描かれた「視線」」では、百貨店の屋上庭園で偶然出会った二組の夫婦が気まずく別れるまでを描いた『屋上庭園』を、＜視線＞を軸に分析した。それによって、これまで貧富をめぐるウェルメイドな喜劇とみなされてきた本作を、近代日本の急速な商業・文化・都市の変容と、それに付随しておこる価値観の変化に翻弄される人々を描き出した作品として捉え直した。

第二部「魅了する「不在」」では、戯曲『チロルの秋』と『歲月』を取り上げ、両作品に共通する、不在の人物を核としたメタシアターの構造を明らかにした上で、岸田の演劇論として読み

解いた。

第3章『『チロルの秋』に見る「虚構」の可能性——夢・遊戯・演劇』では、『チロルの秋』において、旅人のアマノとステラがチロルで過ごす最後の晩に相手の恋人に扮する「空想の遊戯」を行なうことに着目し、不在のステラの元恋人をめぐるこの劇中劇に、現実の介入をよしとしない岸田の純粹演劇の理念が凝縮されていることを明らかにした。第4章「メタシアターとしての歳月」では、浜野家を舞台に浜野八洲子と斎木一正の恋愛、結婚、離婚、そして八洲子が一正との復縁を拒否するまでの十七年間を描いた戯曲『歳月』を論じた。本論文は、筋を展開させる中心人物でありながら一度も舞台に登場することのない一正に着目し、八洲子が語る一正像は、俳優が「何を語り、何のために動くかではなく、如何に語り、如何に動くか」こそが重要であるとする岸田の純粹演劇論の隠喩であると指摘した。これらの二作品を、このように岸田の演劇論として読み解く研究はこれまでになく、作品論として新しいのみならず、岸田の純粹演劇の理念を理解する上でも有意義であると言える。

第三部「身体に巣食う「不在」／社会に蔓延する「不在」」の第5章『『風俗時評』の正体不明の「痛み」』では、戯曲『風俗時評』を取り上げ、各場において登場人物を次々と襲う正体不明の「痛み」の表象を分析した。それによって、先行研究では単純な社会風刺劇と捉えられてきた本作が、「純粹演劇」の理念によって演劇のための演劇を目指してきた岸田の転換点であることを明らかにした。岸田が『風俗時評』において、演劇がいかに社会を表象し批判しうるかという問いを発し、その問いに答えるべく演劇と観客の新たな関係の構築を模索し、プレヒトの叙事的演劇と親和性のある新たな形式を生み出すに至ったという本論文の指摘は、今後の岸田研究に大きな影響を与えうるものであろう。

終章では、岸田が演劇の表象の可能性を「不在」に見出した理由は、舞台に登場しない「不在」の人物・事物は劇中の当事者ですら言語化も論理化もできないものであり、そのような「不在」を表象することに文学にはない演劇固有の表現の可能性を見出したことにあると結論づけた。

以上述べてきたように、本論文は、岸田國士の前期戯曲を、核となる登場人物や事物の「不在」という視点から分析することを通じて、通俗的筋立てを排し「純粹演劇」の理念のもとに劇的文体を追求した岸田のドラマトゥルギーと演劇観の特質を明らかにしたものである。

審査委員会では、岸田戯曲に真摯に向き合い、綿密で丁寧なテキスト分析を行なったことが高く評価された反面、書かれていないことをも読み込もうとする過剰な解釈もあるのではないかという指摘や、同時代の文学状況や出版状況への目配りが必ずしも十分ではない、などの指摘がなされた。

しかしながら、後世に多大な影響を与えながらも戯曲自体が詳細な分析の対象になってこな

かった岸田國士の前期戯曲の緻密な検討を行ったこと、岸田戯曲研究に「不在」という新たな視点を導入したこと、また、個々の作品について定説を覆し新たな解釈を提示して従来の岸田観を刷新したこと、さらに、岸田の「純粹演劇」の理念が抽象的なものではなく劇作において具体的に追求されていたことを明らかにしたことの意義はきわめて大きく、今後の岸田研究において必ず参照されるであろう重要な研究であることは言を俟たない。

本論文は、以上の点から、戯曲研究と演劇論研究の両面において岸田國士研究に大いに寄与するものであると言える。よって審査委員会は、本博士学位請求論文を、博士学位（文学）を授与するに相応しい論文であると判断する。

2013年6月27日

主任審査委員 早稲田大学文学学術院 教授 Ph.D.（アイルランド国立大学ダブリン校）

岡室美奈子

審査委員 早稲田大学文学学術院 教授 博士（文学）早稲田大学

十重田裕一

審査委員 大阪芸術大学 元教授、演劇評論家

大笹 吉雄

審査委員 桐朋学園芸術短期大学 特任教授

井上 理恵

藤田嗣治の舞台美術と劇場空間

博士論文執筆者：佐 野 勝 也

佐野勝也の博士学位請求論文『藤田嗣治の舞台美術と劇場空間』について、その公開審査会は平成25年4月2日午後4時、早稲田大学文学学術院39号館美術史実習室において、主査大高保二郎、副査坂上桂子、同鈴木晶（法政大学教授）、同林洋子（京都造形芸術大学準教授）の全審査員出席のもとに行われた。初めに、佐野から論文の概要説明並びにパワーポイントによる重要箇所についての発表が行われ、その後詳細で真摯な質問、見解が各審査員から出され、活発な討論が交わされた。その概要は以下の通りである

本論文は、総じて、藤田嗣治（レオナルド・フジタ1886－1968）研究において、今まで本格的には論究がなされてこなかった彼の舞台美術作品を研究対象に据え、「藤田の舞台美術と劇場空間の成立と意義」を、美術史学の見地に加え演劇学と舞踊学の視点も交えて多角的に検証及び考察を行った意欲的な試論である。そして、結論から言えば、学位請求論文として博士（文学）の学位に十分に値するものと全員一致で判定された。

本論文で取り上げた舞台美術そのものは決して研究の容易な分野ではない。美術史学と演劇学、舞踊学のはざまにあることもさることながら、それは舞台上で瞬間的に成立し、公演が終われば解体される宿命を背負ったエフィメラルな芸術だからである。しかも舞台美術は、それ自体が独立したものではなく、舞台芸術という総合芸術の一要素であるために、舞台美術を純粹に美術の視点から評価するということは、絵画、彫塑、工芸にくらべて非常に希少であるといえよう。しかし、バレエ・リュスの場合がそうであったように、画家による舞台美術が美術史上に残した足跡は決して小さくない。そうした視点で藤田の作品に接したとき、藤田が非常に真摯な姿勢で舞台美術に取り組み、専門の舞台美術家としても遜色ないほどの創作活動を行ってきたというのは、完全に新たな新知見である。

現在までの調査及び情報収集の結果、藤田嗣治が手掛けた舞台美術として、以下に挙げる9作品を特定した功績は第一に評価される。

- 1) 1923年頃『羽衣』 ノエル・ベリ 追悼公演、パリ、オデオン座
- 2) 1924年前後 能公演 パリ、サン・ジェルマン地理学協会

- 3) 1924年 『風変わりなコンクール』 バレエ・スエドワ、パリ、シャンゼリゼ劇場
- 4) 1927年 『修禅寺物語』 新歌舞伎／仏語版、パリ、コメディ・デ・シャンゼリゼ劇場
- 5) 1942年 『十二月八日の西貢』 新生新派、東京、東京劇場
- 6) 1946年 『白鳥の湖』 東京バレエ団、東京、帝国劇場
- 7) 1947年 『王朝』 日本舞踊 吾妻流、東京、帝国劇場
- 8) 1948年 『静物語』 舞踊詩劇 光輪会、東京、有楽座
- 9) 1951年 『蝶々夫人』 ミラノ、スカラ座

(1957年 ウィーン国立歌劇場が同作品舞台美術プロダクション採用)

公演年を見るとわかる通り、藤田の活動は画家としての初期から晩年にさしかかる時期まで、幅広い時代に渡っており、また公演の作品内容が、前衛的なもの、新歌舞伎を翻訳したもの、日本舞踊の舞踊詩劇という新しい試み、そしてバレエ、オペラのクラシカルなもの、という広範なジャンルにまたがっている点は注目に値しよう。

前提として、藤田の生い立ちと育った環境を振り返る。陸軍軍医を父に持つ裕福な家庭に育ち、近代日本演劇を支えた小山内薫を従兄に持つ藤田の活動は、舞台芸術を常に身近に感じる環境にあって、学生の頃は芝居三昧だったことを認めている。さらに、東京美術学校時代の指導教官であった和田英作の影響を受け、彼の指導のもと、学校卒業後渡仏に至るまで、開館もない帝国劇場で背景部のアルバイトをしていた。佐野は、藤田が舞台美術制作の具体的なノウハウを身につけ、西洋劇場の機構を知ることの出来たこの時期の経験を特に重要なポイントと捉えている。

9作品のうち3)『風変わりなコンクール』は、藤田にとって初の、しかもヨーロッパでの本格的な舞台美術作品である。藤田の舞台装置のための草案が残っているが、当時の新進芸術家を次々と登用して斬新な舞台を創造したバレエ・リュスの活動に代表されるパリの志向を反映した、先鋭的な舞台デザインを藤田も試みている。しかし注目されるのは、これが、バレエ・スエドワがシャンゼリゼ劇場を借り切って豊富な財源を費やして行った公演であり、最新鋭の技術を駆使した照明が舞台美術にもたらす効果について、藤田に新たな目を開かせたことであろう。

4)『修禅寺物語』、5)『十二月八日の西貢』、8)『静物語』の3作品は、公演の記事が掲載された当時の新聞・雑誌の資料を通して、舞台写真等によりわずかに藤田の舞台美術が窺い知れる。舞台美術そのものについて詳細な分析はかなわなかった。5)『十二月八日の西貢』に関しては、藤田が舞台美術案を構想したであろう検閲前の内容も判断できる検閲台本、8)『静物語』に関しては出演者が実際に稽古に使用した上演台本を、著作権継承者の方々の協力も得て調査し、かつ今まで公表されたことのなかった2つの台本の全内容をデータ化したものを本論文参考資料として掲載している。

1)と2)の能公演、7)『王朝』は舞台美術を手掛けたという事実が確認できるのみで、デザインの内容についてはほとんど不明であったが、これもその公演の概要と藤田がかかわった経

緯など事実関係を掘り起こす作業から着手し、画家藤田を知る上での美術史的参考資料となる報告を行った。

6)『白鳥の湖』については、当初の藤田直筆の舞台美術関連デザイン画は公演期間中に失われ、舞台写真も数枚しか残っていない状況であった。しかし、佐野の調査段階で幸運にも、藤田の《『白鳥の湖』の舞台装置のための草案》と巡り合うことができた。装置製作を手掛けた当時帝国劇場背景部の関係者の方が実際の作業用に藤田の指示を受けて模写したものであり、生前の君代夫人から藤田の《『白鳥の湖』の舞台装置のための草案》であることの承認も得られた貴重な資料である。さらに当時の関係者へのインタビューや記録資料を詳細に分析し、本作品については特に比重を置いて考察を行った。確かに、この『白鳥の湖』全幕公演は日本でのバレエ史上特筆すべき事件で、その舞台装置を実証的に再現しようとしたその成果と意義は高く評価された。しかし同時に、同時期の絵画作品《優美神》、《私の夢》と対照させてその相関関係を考察した点においては「いささか我田引水で無理がある」と審査員から批判された。

最後の9)『蝶々夫人』であるが、世界オペラに君臨するスカラ座からの依頼により手掛けた超人気演目の舞台美術である。それも、戦時中に破壊された建物の修復が終わり新生スカラ座として再起をかけての公演であり、藤田がこの舞台美術を手掛けた事実をもっと評価されるべきではないかと佐野は考える。しかし、なぜ藤田に白羽の矢が立ったのか、その前後の藤田をめぐる環境を精査すればもっと面白い事実が出てくると提起了された。佐野は、スカラ座所有の豊富な資料を中心として、さらに東京国立近代美術館アートライブラリーで公開された藤田旧蔵書コレクションから新しい資料を発見することも出来、詳細な分析を行った。藤田は本作品で、ジャポニズムに馴染んだヨーロッパ人の目にも違和感のない日本の情景を描き出している。ここには、壁画《秋田の行事》に見られたダイナミックな構図や、作品空間の中にお気に入りの小物たちを丹念に描き込んだ自画像やアトリエを題材にした藤田の絵画作品との関連も認められ、藤田の舞台美術作品における集大成のようである。

これまでの藤田研究において舞台美術にはほとんど光があたりなかった。しかし、調査研究を重ねてきた佐野は「藤田の舞台美術」は一つの分野として成立しうるのではないかと問題提起をしている。その点は審査員の間でも同じ見解であった。

藤田に関しては全般的に言って今後もさらに新しい資料・情報が出てくるであろうが、舞台美術についても例外ではない。今回の公開審査会での議論や助言を踏まえて、改めるべき点は修正、反省し、また補足を重ねて、本「藤田の舞台美術」論を一日も早く上梓し、藤田芸術の新たな側面と魅力を世に知らしめてくれることを今後に期待することで審査会は締めくくられた。

以上

2013年4月2日

主任審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	大高保二郎
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	坂上 桂子
審査委員	早稲田大学文学学術院 客員教授	鈴木 晶
審査委員	京都造形芸術大学 准教授 Ph.D (パリ第一大学)	林 洋子